

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	鎌田 明美
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授） 梶井 一暁 副主査：（岡山大学特任教授） 尾上 雅信 委 員：（鳴門教育大学教授） 余郷 裕次 委 員：（鳴門教育大学教授） 幾田 伸司 委 員：（岡山大学教授） 熊谷慎之輔
3. 論文題目	中学校国語科における絵本の読みあいの教育効果の研究
4. 審査結果の要旨	学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座 鎌田明美 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和7年2月16日（日）14時00分～14時30分 場 所：Zoomによるオンライン会議 1. 学位論文の構成と概要 本論文は、中学生を対象として、国語科教育において物語絵本（以下、絵本）の読みあいがもたらす教育効果を検証するものである。読書材としての絵本の可能性に着目し、実践研究により、中学校の国語科授業で生徒が絵本を読みあう学習活動を通して高める資質・能力を分析し、絵本を用いた国語科授業モデルを開発しようとするものである。 以下、本論文の構成と概要を示す（節以下のタイトルは省略）。 序章 研究の目的を述べるとともに、問題の所在として、中学校国語科教育と読書指導の現状と課題を整理し、絵本の読みあいの導入の意義を主張している。先行研究の検討として、絵本研究や読書研究の成果と課題を明らかにし、中学生を対象に絵本の読みあいに関する実践研究を行う方法と視点を提示している。 第1章 読書材としての絵本 絵本は言葉と絵からなる本である。言葉と絵が結びつき、またそのあいだを行き来する読書は、読者を豊かな言語活動に誘い入れる。従来、絵本は幼少期の読書材として活用されることが多いが、絵本の魅力は年齢や発達に制約されるものではない。中学生の読書材としても有効であることを考察し、中学生を対象とした絵本研究および絵本を用いた読書指導の推進の必要を論じている。

第2章 絵本の読みあいによる解釈（読解）する力の育成

A市A中学校の1年生32人を対象に、国語科の授業実践を、年間（4月～2月）を通じて行った。月1回程度、生徒が絵本を相互に読みあう学習活動を実施し、生徒が記述するワークシート（読みあいシート）を主な資料に、生徒の学習過程と変化を分析した。本章では、絵本の読みあいによる解釈（読解）する力の変化を検討し、ループリックの作成・評価により、解釈する力の向上を明らかにした。多くの生徒において、人物像や物語の全体像の読みが深まり、場面や人物の心情の解釈が自分の経験と結びつけられるものとなったことを考察している。

第3章 絵本の読みあいによる選書意識の育成

次に、生徒における選書意識の変化を検討した。読みあいは個人読書ではなく、相手がいる読書である。どの本を選ぶか。ループリックの作成・評価により、当初は自己嗜好中心の選書が多かったが、相手を意識し、相手の好みや関心を気遣う選書を行ったり、読むときに相手に分かりやすく伝えようと音読の工夫を行ったり、聞き方の工夫を行ったりするようになった変化を考察している。相手を思いつつ、自分の考えを表現する選書意識の向上がみられた。

第4章 絵本の読みあいによる傾聴態度の育成

生徒における傾聴態度の変化を考察し、絵本の読みあいの継続が傾聴態度の育成を促すことを明らかにした。生徒の読みあいシートの記述について、KH Coderなどを用いて分析し、学級全体で友達の読みに共感したり反応したりしながら聞く支持的な雰囲気が醸成されたこと、また真剣に集中して聞く学習態度が育ってきたことを考察している。絵本の読みあいを通じ、読み手と聞き手が受容的な相互関係を形成する過程を論じている。

第5章 教育効果と意義

絵本の読みあいを継続することにより、中学生のなかで解釈（読解）する力、選書意識、傾聴態度が育つことを、教育効果として指摘している。この3つは、資質・能力（知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）の枠組みから捉えると、それぞれ個別分離的な効果ではなく、関連しあって育成されるものであるところに特質があるといえる。協働的な学習活動としての絵本の読みあいは、主体的・対話的で深い学びを実現する授業モデルとなる意義を示している。

終章

研究の成果と課題を示している。主な成果は、第1は、中学生を対象とした本格的な絵本の実践研究をはじめて実施したことである。第2は、独自のワークシートとして読みあいシートを作成することにより、教育実践記録の様式を提案したことである。第3に、中学生の読書指導として、解釈（読解）する力、選書意識、傾聴態度を育成する実践モデルを提示したことである。第4に、協働的な学習のモデル開発につながることである。第5に、教科書の読みに困難を抱える学習者に対し、絵本が有効な教材となることを示したことである。

課題は、実践事例を蓄積し、教育効果の検証を継続するとともに、教科横断的な取組の可能性を追求することである。

2. 審査経過

本論文は、中学生における絵本の読みあいがもたらす教育効果を検証し、絵本を用いた国語科授業のモデル開発を試みる実践研究を内容とするものである。

論文審査において討議した主な点は、以下のとおりである。

(1) 研究目的と論文構成の整合性

本論文は、中学生が国語科授業のなかで絵本の読みあいを学習活動として継続して行うことにより高める資質・能力を明らかにするものである。そのため、研究1で解釈（読解）する力、研究2で選書意識、研究3で傾聴態度の変化を検証し、3つの角度から教育効果を考察する構成となっている。研究目的に整合する妥当な論文構成であると評価できる。

(2) 先行研究の検討と研究の方法・資料

先行研究について、絵本研究や読書研究の成果の検討から、絵本の読みあいの実践のための理論づけを適切に行っている。研究の方法・資料について、関連領域を含む先行研究の検討と教育者としての自身の経験・実践を総合的に考究する手続きから、慎重に設定されており、学術的な水準と有効性を有していると判断できる。

(3) 考察の客観性

生徒の学習成果を評価するため、ループリックを用い、集団的变化を分析するとともに、事例分析を行い、生徒個人の変化も検討している。集団と個人を視野におさめた考察を展開しており、客観的な結論を導いていると認められる。また、ループリックは同僚教員と数度協議し、作成・修正するものであり、恣意性を排する配慮が認められる。

(4) 論文の独自性と発展性

従来、絵本は幼少期の読書材として活用されてきたが、中学生にとっても有効であることを見出し、絵本を用いた実践研究を実現した成果は独自性があり、新規性に富む。読書指導の可能性を広げる成果の提出は、教育実践学の観点からも有益である。また、絵本にもとづく国語科をこえる教科横断的な学習活動の展開についても、今後の発展的取組が期待できる。

(5) 学校教育の実践への貢献

中学生における絵本の読みあいの教育効果が検証されたことにより、中学校段階での絵本を活用した国語科教育や読書指導のモデルとして、本研究で得た知見を活用できる。中学生の読書習慣形成や教科書の読みに困難を抱える生徒の学習など、学校現場の課題に応える内容を研究主題化し、考察した本論文は、学校教育の実践に貢献する成果が認められ、学校教育学の発展に寄与するものといえる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、鎌田明美の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。